

[ジベレリン水溶液]

農林水産省登録 第15697号

性状：白色水溶性錠形 1錠 0.55g

毒性：普通物

危険物：－

有効年限：5年

包装：(ジベレリン 25mg × 8錠) × 10 × 10

ジベレリン協和錠剤

有効成分：ジベレリン……………4.55% [1錠中ジベレリン 25mg含有]



こちらのバーコードをスマートフォン等で読み取るとi-農力サイトに掲載されている本剤の新しい情報をご覧いただけます。また、詳しい読み取り方・最新情報については11頁をご覧ください。

[適用と使用方法]

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
ぶどう (ヒムロッドシードレスを除く2倍体米国系品種) [無核栽培]	無種子化果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 100ppm 第2回目 ジベレリン 75~100ppm	果房散布の場合は 30~100ℓ/10a	満開予定日約14日前(第1回目)及び 満開約10日後(第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内
ぶどう (ヒムロッドシードレス)	果粒肥大促進	ジベレリン 100ppm	－	着粒後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内
ぶどう (大粒系デラウェア) [無核栽培]	無種子化果粒肥大促進	ジベレリン 200ppm	－	展葉 7~8枚時	1回	花房浸漬 (ホルクルロフェニュロン5~10ppm液に加用)	1回
ぶどう (デラウェア) [無核栽培]	無種子化果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 100ppm 第2回目 ジベレリン 75~100ppm	果房散布の場合は 30~100ℓ/10a	満開予定日約14日前(第1回目)及び 満開約10日後(第2回目) 満開予定日18~14日前(第1回目)及び 満開約10日後(第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布 第1回目：花房浸漬 (ホルクルロフェニュロン1~5ppm液に加用) 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内
ぶどう (キャンベルアーリーを除く2倍体米国系品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 50ppm	－	満開 10~15日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内
ぶどう (キャンベルアーリー) [有核栽培]	果房伸長促進	ジベレリン 3~5ppm	30~100ℓ/10a	満開予定日約20~30日前 (展葉3~5枚時)	1回	花房散布	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計3回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
ぶどう (2倍体欧州系品種) [無核栽培]	無種子化果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	-	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目： 花房浸漬 第2回目： 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内
		ジベレリン 25 ppm		満開 3～5日後 (落花期)	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房浸漬 (ホルクロールフェニユロン10ppm液に加用)	
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ/10 a	展葉 3～5枚時	1回	花房散布	
ぶどう (ヒロハンブルグを除く2倍体欧州系品種) [有核栽培]	果粒肥大促進	ジベレリン 25 ppm	-	満開 10～20日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内
ぶどう (ヒロハンブルグ) [有核栽培]		ジベレリン 50～100 ppm	果房散布の場合は 70～80 ℓ/10 a	満開 10～15日後		果房浸漬 又は果房散布	
ぶどう (キングデラ、ハニーシードレス、BKシードレスを除く3倍体品種)	着粒安定 果粒肥大 促進	第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 25～50 ppm	-	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目： 花房浸漬 第2回目： 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm	30～100 ℓ/10 a	展葉 3～5枚時	1回	花房散布	
ぶどう (BKシードレス)	着粒安定 果粒肥大 促進	第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 25～50 ppm	-	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目： 花房浸漬 第2回目： 果房浸漬	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内
		ジベレリン 100 ppm		満開 3～6日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房又は 果房浸漬	
ぶどう (キングデラ)		第1回目 ジベレリン 50 ppm 第2回目 ジベレリン 50～100 ppm	果房散布の場合は 50～100 ℓ/10 a	満開時～満開3日後 (第1回目) 及び満開10～15日後 (第2回目)	2回	第1回目： 花房浸漬 第2回目： 果房浸漬 又は果房散布	2回
ぶどう (ハニーシードレス)		ジベレリン 100 ppm	-	満開 3～6日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房又は 果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数	
ぶどう (サニールシュを除く巨峰系4倍体品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 12.5~25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	-	満開時～ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目： 花房浸漬 第2回目： 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内	
		ジベレリン 25 ppm		満開 3～5日後 (落花期)		1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内		花房浸漬 (ホルクロールフェニユロン10 ppm液に加入) 花房浸漬 (満開10～15日後にホルクロールフェニユロンによる果粒肥大促進処理を行うこと)
	無種子化	ジベレリン 12.5~25 ppm		満開時～ 満開3日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房浸漬 (満開10～15日後にホルクロールフェニユロンによる果粒肥大促進処理を行うこと)		
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm		30～100 ℓ/10 a	展葉 3～5枚時	1回		花房散布
ぶどう (サニールシュ) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 12.5~25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	-	満開時～ 満開3日後 (第1回目) 及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目： 花房浸漬 第2回目： 果房浸漬	3回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計5回以内	
		ジベレリン 25 ppm		満開 3～5日後 (落花期)		1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内		花房浸漬 (ホルクロールフェニユロン10 ppm液に加入) 花房浸漬 (満開10～15日後にホルクロールフェニユロンによる果粒肥大促進処理を行うこと)
	無種子化	ジベレリン 12.5~25 ppm		満開時～ 満開3日後	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	花房浸漬 (満開10～15日後にホルクロールフェニユロンによる果粒肥大促進処理を行うこと)		
	果房伸長促進	ジベレリン 3～5 ppm		30～100 ℓ/10 a	展葉 3～5枚時	1回		花房散布
ぶどう (巨峰、ルビーロマン、ハニービーナス) [有核栽培]	着粒密度 低減 果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25 ppm 第2回目 ジベレリン 25 ppm	-	満開予定日 14～20日前 (第1回目) 及び満開 10～15日後 (第2回目)	2回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	第1回目： 花房浸漬 (ホルクロールフェニユロン3 ppm液に加入) 第2回目： 果房浸漬	1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内	
		ジベレリン 25 ppm		満開 10～20日後		1回、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計2回以内		果房浸漬
		ジベレリン 50～100 ppm		満開時～ 満開7日後		2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内		果房又は 果房浸漬
ぶどう (高尾、ふくしずく)	果粒肥大促進	第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 50 ppm	-	満開時 (第1回目) 満開4～ 13日後 (第2回目)	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	果房浸漬	2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内	
ぶどう (あづましずく)		第1回目 ジベレリン 25～50 ppm 第2回目 ジベレリン 50 ppm		満開時 (第1回目) 満開4～ 13日後 (第2回目)		2回以内、 但し降雨等により再処理を行う場合は合計4回以内		果房浸漬

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
かんきつ (苗木、ただし、温州みかんを除く)		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	12~3月	1回	立木全面散布 又は枝別散布	1回
	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60~80倍液に 加用)	
		ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後	散布			
不 知 火 は 知 る 火 み	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3月	3回以内	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60 ~80倍液に加用)	
	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
		ジベレリン 25~50 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後		散布	
水腐れ軽減	ジベレリン 0.5~1 ppm	50~500 ℓ/10 a	着色終期 但し、収穫 7日前まで	果実散布			
ぼんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3月	1回	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60~80倍液に 加用)	
	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
		ジベレリン 25~50 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後		散布	
水腐れ軽減	ジベレリン 0.5 ppm	50~500 ℓ/10 a	着色始期~ 4分着色期 但し、収穫 21日前まで	果実散布			
長門ユズキチ (無核)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後		散布	
			50~100 ℓ/10 a	開花期~ 開花終期		花又は 果実散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10~25 ppm	50~400 ℓ/10 a	収穫予定 14~30日前		果実散布	
す だ ち	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後	1回	立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開10日後		散布	
			ジベレリン 5~25 ppm	50~400 ℓ/10 a		収穫予定 7~30日前	果実散布

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
平 兵 衛 酢 か ぼ す	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	1 回	立木全面散布 又は枝別散布	1 回
	落果防止		50～100 ℓ /10 a	開花始め～ 満開 10 日後		散布	
	果皮の緑色維持	ジベレリン 10～25 ppm	50～400 ℓ /10 a	収穫予定 14～30 日前		果実散布	
ワ シ ン ト ン ネ ー ブ ル	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a	収穫後～3 月	1 回	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液に 加用)	1 回
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	落果防止	ジベレリン 500 ppm	30～40 ℓ /10 a	満開 10～20 日後の幼果期		幼果に散布	
日 向 夏	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a	収穫後～3 月	1 回	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液に 加用)	1 回
		ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後		立木全面散布 又は枝別散布	
	無種子化 落果防止	ジベレリン 300～500 ppm	30～40 ℓ /10 a	満開 7～10 日後		果実散布	
温 州 み か ん (苗 木)	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	11～1 月	1 回	立木全面散布 又は枝別散布	3 回以内
		ジベレリン 10 ppm					
		ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a			立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液又は 展着剤に加用)	
温 州 み か ん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 25～50 ppm	50～250 ℓ /10 a	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	1 回	立木全面散布 又は枝別散布	3 回以内
		ジベレリン 10 ppm					
		ジベレリン 2.5 ppm	200～700 ℓ /10 a	11～1 月 但し、収穫後		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液又は 展着剤に加用)	

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
温州みかん	落果防止	ジベレリン 10 ppm	50~100 ℓ/10 a	開花始め~ 満開 10 日後	1 回	散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000~2000 倍 液に加用)	3 回以内
		ジベレリン 25~50 ppm				散布	
	浮皮軽減	ジベレリン 1~5 ppm	100~400 ℓ/10 a	収穫予定日 の3カ月前 但し、収穫 45 日前まで		果実散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000~2000 倍液に加用)	
きんかん	花芽抑制による樹勢の維持	ジベレリン 2.5 ppm	200~700 ℓ/10 a	収穫後~3 月		立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60~80 倍液に 加用)	1 回
	落果防止	ジベレリン 25~50 ppm	50~250 ℓ/10 a	収穫直後~ 収穫約1カ月後 開花始め~ 満開 10 日後		立木全面散布 又は枝別散布 散布	
	着果安定	ジベレリン 300 ppm	30~60 ℓ/10 a	一番花開花期		花に散布	
びわ (3 倍体)	着果安定 果実肥大 促進	第1回目 ジベレリン 200 ppm 第2回目 ジベレリン 200 ppm	-	満開予定日約7 日前~満開時 (第1回目) 及び第1回目処 理後 35~60 日 (第2回目)	2 回	ホルクロール フェニユロン 20 ppm 液に加用 第1回目: 花房浸漬 第2回目: 果房浸漬	2 回
びわ(麗月)						25~40 ℓ/10 a	
すもも (貴陽)	着果安定	ジベレリン 100~200 ppm	20~50 ℓ/10 a	満開 20~30 日後 (第1回目) 満開 50~60 日後 (第2回目)		果実散布	
アセロラ	着粒安定	ジベレリン 25 ppm	100~400 ℓ/10 a	開花期	1 花当り 1 回	花に散布	1 花そう当り 3 回以内
野菜類	発芽促進	ジベレリン 50~200 ppm	-	は種前	1 回	種子浸漬	1 回
いちご (促成栽培)	着果数増加 熟期促進	ジベレリン 10 ppm	1 株当り 5 ml	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	1 株当り 6 回以内	茎葉全面散布	1 株当り 10 回以内
いちご	果柄の 伸長促進			頂花の出蕾直 後~開花直前	1 花房当り 1 回	株の中心部に 散布	
いちご (親株床)	ランナー 発生促進	ジベレリン 50 ppm	1 株当り 10 ml	採苗時 ランナー発生 直前~発生初期	1 株当り 1 回	茎葉散布	1 株当り 1 回

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農業の総使用回数
畑わさび	花茎の抽出時期促進及び発生量増加	第1回目 ジベレリン 100 ppm 第2回目 ジベレリン 100 ppm	1株当たり 2ml	花芽分化後の10月下旬(第1回目)及び第1回目処理後約10日後の11月上旬(第2回目)但し、収穫60日前まで	2回	株の中心部に散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、は種後は2回以内)
さやいんげん (矮性(促成又は半促成栽培))	節間伸長促進	ジベレリン 5 ppm	50ℓ/10a	本葉 0.5~1.5枚展開時	2回以内	茎頂部散布	
しそ (花穂)	種の伸長促進 花径の伸長促進			出穂期 但し、収穫5日前まで		茎葉散布	
メロン	着果促進	ジベレリン 200 ppm	1花当たり 2~5ml	開花前日~翌日	1花当たり 1回	散布 (4-CPA剤 50倍液に加用)	種子への処理は1回、 1花当たり1回
みつば (軟化栽培を除く)	生育促進	ジベレリン 10 ppm	50~100 ℓ/10a	本葉2~3枚時(第1回目)とその2週間後(第2回目)但し、収穫14日前まで	2回	葉面散布	3回以内 (種子への処理は1回以内、は種後は2回以内)
みつば (軟化栽培)		ジベレリン 20~50 ppm		根株伏込時			
ばれいしょ	休眠打破による萌芽促進及び小粒いもの増収	ジベレリン 5~10 ppm	—	植付前	1回	30秒間 種いも浸漬	1回
種いも用 ばれいしょ			250~300 ml/種いも 10 kg			—	
	休眠打破による萌芽促進及び全粒種いもの増収		250~300 ml/種いも 10 kg			種いも散布	
きく	開花促進 草丈伸長促進	ジベレリン 25~100 ppm	50~100 ℓ/10a	生育期	2回以内	茎葉散布	
カラ	生育促進	ジベレリン 50 ppm	—	植付時	1回	球根浸漬	2回以内
			50~150 ℓ/10a	花茎伸長期			
スパティフィラム	開花促進	ジベレリン 250~500 ppm	30~40 ℓ/10a	出荷予定期の2~3カ月前	1回	茎葉散布	1回
トルコギキョウ	生育促進	ジベレリン 50~100 ppm		生育期間中にロゼット化した時			
ソリダゴ		ジベレリン 25 ppm	1株当たり 1ml	活着直後又は萌芽期			

作物名	使用目的	使用濃度	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	ジベレリンを含む農薬の総使用回数
アイリス	生育促進	ジベレリン 50~100 ppm	-	植付時	1回	球根浸漬	1回
花き類	発芽促進	ジベレリン 50~200 ppm		は種前		種子浸漬	
アザレア	開花促進	ジベレリン 250~500 ppm		30~40 ℓ/10 a		開花予定日 約1カ月前	
さつぎ (施設栽培苗)	茎の伸長促進 花芽分化の抑制	ジベレリン 100~200 ppm	50~100 ℓ/10 a	茎の伸長初期~ 伸長終期 (開花盛期以降) 1~2週間間隔	3回	頂芽に十分 散布	3回以内
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破による生育促進	ジベレリン 25~50 ppm	50~200 ℓ/10 a	休眠期	1回	切り枝 全面散布	1回
			-			切り枝浸漬	

⚠ 使用上の注意事項

[1] 薬液の調製及び取扱上の注意

- 本製剤は表の如く所定の水にうすめれば希望の水溶液を作ることが出来る。ただし、一時に全量の水に溶かすことなく、まず少量の水に溶かしたのちに希釈する。

錠剤1錠（ジベレリン 25 mg）当り水量

ジベレリン濃度 (ppm)	10 ppm	12.5 ppm	25 ppm	50 ppm	75 ppm	100 ppm	200 ppm	300 ppm	500 ppm
水量 (ℓ)	2.5 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0.5 ℓ	0.333 ℓ	0.25 ℓ	0.125 ℓ	0.083 ℓ	0.05 ℓ

錠剤8錠（ジベレリン 200 mg）当り水量

ジベレリン濃度 (ppm)	10 ppm	12.5 ppm	25 ppm	50 ppm	75 ppm	100 ppm	200 ppm	300 ppm	500 ppm
水量 (ℓ)	20 ℓ	16 ℓ	8 ℓ	4 ℓ	2.667 ℓ	2 ℓ	1 ℓ	0.667 ℓ	0.4 ℓ

- 使用にあたってはその都度溶解調製することが望ましい。溶解後放置すると効力が低下する場合があるので、なるべく調製当日に使い切る。
- 本剤の使用にあたっては、使用濃度、使用量、使用時期、使用方法を誤らないように注意し、特に初めて使用する場合は病害虫防除所など関係機関の指導を受けることが望ましい。
- ボルドー液などアルカリ性の強い薬剤との混用は避ける。

[2] 使用上の注意

●ぶどう

○ぶどうに関する作物名中の品種による区分は、ジベレリンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分（品種群）に該当するか、病害虫防除所等関係機関に確認してから使用する。

○下記の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

○ぶどうの品種による区分

- ・2倍体米国系品種

「マスカット・ベリーA」「アーリースチューベン（バッファロー）」「旅路（紅塩谷）」

- ・ 2 倍体欧州系品種
「ロザリオ ピアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリサ」「イタリア」「紫苑」「ルーベルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」
- ・ 3 倍体品種
「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」「BK シードレス」
- ・ 巨峰系 4 倍体品種
「巨峰」「ピオーネ」「安芸クイーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稔」「高妻」「白峰」「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」

(「あづましずく」「ふくしずく」等の巨峰系 4 倍体シードレス品種は該当しない)

- 降雨や、異常乾燥（フェーン現象等による異常乾燥）の心配の無い日を選んで処理する。
- 処理後の天候急変（降雨、異常乾燥）で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ジベレリンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受ける。
- 本剤は樹勢の弱い樹や登熟の悪い枝等に対しては、効果が不十分なので使用を避ける。樹勢がやや強めの方が安定した効果が得られるが、極端に樹勢が強い場合はかえって効果が出にくいので樹勢の管理には十分気をつける。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 本剤の使用により、着粒が安定するとともに果粒の肥大が促進されるので、着粒過多（過密着）による裂果発生のおそれがある。また、果梗が硬化し脱粒しやすくなるので、裂果や脱粒を未然に防ぐため、開花前の整房や着粒後の摘粒等の栽培管理を適切に行う。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。
- 使用時期や使用濃度を誤ると、花振り、着粒過多（過密着）、有核果混入等のおそれがあるので、使用時期、使用濃度は厳守する。
- 無種子化を目的とした着粒前の処理の際は、特に丁寧に処理することを心がけ、薬液が花蕾全体に十分にきわたるよう注意する。
- 果粒肥大促進を目的とした着粒後の処理の際は、薬液が付きすぎないように、処理後ぶどうの枝やぶどう棚の針金を軽く振って余分な薬液を落とす。
- 本剤をぶどう（2 倍体米国系品種）に無種子化・果粒肥大促進の目的で使用する場合、第 2 回目処理を浸漬で行うときは 100 ppm で処理する。また、第 2 回目処理を散布で行うときは 75～100 ppm（80～100 ℓ/10 a）で処理する。散布で行う場合、散布処理は浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹に対して行い、薬液が果房に十分かかるように注意する。
- 本剤とストレプトマイシン剤を併用することで無核果率の向上を図ることができる。使用に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。また、ストレプトマイシン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- 本剤をぶどう（デラウェア）[無核栽培] で使用する場合、満開予定日約 14 日前よりも早く処理するときは、花振りすることがあるのでホルクロルフエニユロン剤を加用する。また、ホルクロルフエニユロン剤を加用して処理する際は、ホルクロルフエニユロン剤の使用上の注意事項を厳守する。
- 本剤をぶどうの果房伸長促進の目的で使用する場合は、必ず花房だけを目掛けて花房全体が十分濡れる程度に部分散布する。
この時期に誤って大量の薬液が枝や葉にかかる、その翌年に発芽不良などの新梢の生育障害が起るおそれがあるので、動力噴霧機やスピードスプレーヤなどによる全面散布は行わない。
- ぶどう（あづましずく）に使用する場合、満開 4～13 日後の 1 回処理で十分な効果が得られるが、栽培方法や樹勢等によっては満開時と満開 4～13 日後の 2 回処理する必

要があるので、使用に当っては病害虫防除所等関係機関の指導を受ける。

- ぶどう（巨峰、ルビーロマン、ハニービーナス）〔有核栽培〕に果粒肥大促進の目的で使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実を確認してから処理する。

●かんきつ

（落果防止）

- 本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種等により本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種等に使用する場合は最寄りの指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認した上で使用する。
- 果面の粗滑や果皮の厚さ等果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守る。

（花芽抑制による樹勢の維持）

- 衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しない。
- 低温が続いた年（極端な低温の年）または花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心がける。
- 散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。
- ジベレリンの使用濃度を2.5 ppmで使用するときは、マシン油乳剤60～80倍液に加用する。
- マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

●温州みかん

（花芽抑制による樹勢の維持）

- ジベレリンの使用濃度を2.5 ppmで使用するときは、マシン油乳剤60～80倍液または展着剤に加用する。
- マシン油乳剤または展着剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤または展着剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

（浮皮軽減）

- 本剤の処理により、着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。

使用濃度の目安

- ・貯蔵用または樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3～5 ppm
- ・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1～3.3 ppm

- 本剤処理により薬斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

●ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。

- 異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がないことがある。
- 通常効果1果当り小型噴霧器で0.1～0.2 ml程度を噴霧する。

●長門ユズキチ（無核）

長門ユズキチの落果防止および着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●日向夏

日向夏の無種子化および落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花または幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●びわ（3倍体）

- 本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理する。
- 樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果

実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

- 第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守る。

●びわ（麗月）

- 麗月では他のびわ品種の花粉により受精し有種子果実となるため、無核果実生産を行う場合は、他の品種の花粉による受精を行わないように、開花前から花房への被袋を行う。
- 樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

●すもも（貴陽）

- 授粉を行ってから、散布する。
- 葉液が付きすぎないように、処理後、枝や棚の針金を軽く振って余分な葉液を落とす。
- 第1回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用する。
- 本剤の散布により結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

●みつば（軟化栽培を除く）

葉の表裏に十分散布する。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

●みつば（軟化栽培）

灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減する。

●いちご

〈着果数増加・熟期促進〉

- 処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒害がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。
- 本剤の散布適期は休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待できないので、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決める。
- 又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。
- 過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。

〈果柄の伸長促進〉

処理したいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出た頃寒害がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。

●畑わさび

- 花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。
- 全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理する。気温が5℃以下では効果が劣るので11月上旬からビニール等で被覆し、保温管理する。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意する。

●ばれいしょ

- 種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
- 浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
- 薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくで発芽遅延等の葉害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。

- 種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
- 品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。
- 種いも用ばれいしょ
 - 本剤は種いも生産用として原採種圃に植え付ける種いもに用いるものである。
 - 種いも切断後の処理は薬害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
 - 浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
 - 薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくくと発芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
 - 種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。
 - 薬剤処理した種いも及びその収穫物は食料又は飼料には使用しない。
 - 品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認した上で使用する。

●花き

- 処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意する。
- 処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴霧する。
- ソリダゴ
 - ・高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～3月頃）に処理する。
 - ・処理により草丈および切り花重がやや低下することがある。
- さつき
 - さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。
- さくら（切り枝促成栽培）
 - 休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。

[3] 適用作物群に属する作物又はその新品種に本剤をはじめて使用する場合は、使用者の責任において事前に薬効薬害の有無を十分確認してから使用する。なお、病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。



安全使用上の注意



- 本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。
眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。使用後は洗眼する。
- 使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。
- 浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。
- 直射日光をさけ、なるべく低温で乾燥した場所に密封して保管する。